

中世ファルスの「性欲への笑い」と キリスト教社会

小 澤 祥 子

I. はじめに

1. 本論の目的

15～16世紀の中世末期からルネッサンス期における世俗劇上演の最盛期にあって、中でも民衆に最も愛好されたのはファルス *farce* であった。現存する作品から見てその主要なテーマの1つが性欲であり、妻の姦通、すなわちコキユものが多いということはよく指摘されるところである。16世紀半ばになると、それを低俗なものとする批判が相次ぐ。ファルス研究者ベルナデット・レイ＝フロー B. Rey-Flaud は『ファルス 笑いの仕掛け』¹⁾ の序で、16世紀以降の多くの文学者・批評家・研究者たちのファルスに対する批難の言葉を紹介している。それらの中からファルスを形容するフランス語を拾うと、*obscène, lascive, licencieuse, grossière, impudente, infâme, luxurieuse, voluptueuse, déshonnête* 等々、「淫らなこと」を意味する言葉が並ぶ。このようなファルスのとらえ方は20世紀の研究者も同様であって、ランソン *Gustave Lanson* は次のように言う。

ファルスは“文学”ではない。完全に民衆的なジャンルで、民衆の精神が自分に似せて作り出したものである。作品の大部分は耐え難いほど下品で、考えられないほど陽気さに溢れている。²⁾

そのまったくの卑俗さに於いて、フランス的精神の低劣さの典型である。³⁾

ファルスが、このように下品で淫らなものと後世の文学者たちに酷評

されているにもかかわらず、中世の社会に生まれ、おそらく100年以上興隆を保ち、また16世紀以降も民衆の劇として生きのびたのはなぜか。ファルスは「笑劇」と訳されるように「笑わせること」を目的とする劇だが、その笑いの中心の1つが「性欲」だったのは、ランソンの言うように「フランス的精神の低劣さの典型」を示し、当時の人々が特に「低俗」だったからだろうか。いや、そうではなく、後世の人々が猥らだと斥けるほどにその時代の人々が喜んだのは、それを必要とする内的必然性があったからではないだろうか。演劇は、演ずる者と見るものが集い寄って、「その時間」を共有することによって成り立つものである。人々は共に「性欲」を笑うことが必要だったのではなかろうか。つまり、中世という社会が、民衆に演劇として「性欲」を笑うことを必要とさせたのではなかろうか。では「中世」とはどんな社会だったのか。中世史研究者のジャック・ル・ゴフ Jacques Le Goffは「骨の髄まで宗教に浸透されていたこの社会⁴⁾」と述べている。ファルスの笑いが中世という社会から生み出されたとしたら、それはその社会を支配していたと思われる宗教、すなわちキリスト教の教えと、それを具現して民衆を導こうとした教会の姿勢とに、密接に関わっているはずである。

本論の目的は、この、ファルスの「性欲への笑い」と中世キリスト教社会の関係を、具体的なファルスの作品を通して考察することである。

2. ティシエの『ファルス作品集』について

現存する中世世俗劇は400篇ほどで、ファルスは分類のしかたによって135～200篇と異なる⁵⁾。その中の65の作品を、ソルボンヌ大学教授アンドレ・ティシエ André Tissier が『ファルス作品集 (1450-1550)』⁶⁾ という13巻（最終巻は補遺）の本にまとめて1986年から2000年にかけて出版し、同時にその65篇の現代語訳を『現代フランス語訳中世末期のファルス』⁷⁾ 4巻として出版した。本論ではこのティシエの選集の作品を考察の対象とする。現存作品の40%ほどではあるが、彼が作品集の序で「多様性は私の選択のルールだ」と言っているように、出典もテーマも表現

法もバラエティに富んでおり、現存作品全体の傾向をカバーしているものと思われる。

65篇のうち、広い意味で性欲に関わる作品は半数以上の35篇である。その中で姦通を扱うものは24篇であるが、夫の浮気は1篇だけで他は全て妻の裏切りあるいはその可能性をめぐって展開する。妻をめぐるこれらの23篇を「コキユ物」として分類する。作品集の3分の1以上を占めるこのコキユ物から、

1. 妻の不満をめぐるもの
2. 淫らさで笑いを誘うもの
3. 姦通による子どもをめぐるもの

という観点で3篇を選び、作品の笑いが、キリスト教の教えと当時の社会とどのようにつながっているのかを見ていきたい。

Ⅱ. 作品の考察

1. 妻の不満をめぐるもの：『ラウレ・プロワヤール』 *Raoullet Ployart*⁸⁾

この作品の登場人物の名前は全て寓意的である。ラウレ・プロワヤールとは「(ブドウ畑を耕す) 鋤が折れ曲がったラウレ」という意味で、それはそのまま年老いて性的不能になり妻を満足させられない夫の状態を表す。妻はドゥブレット *Doublette* と名づけられ、夫から得られない満足を求めて若い農夫と関係を持つが、夫にはあくまでしらを切る「二重性」を持つ。下男のモースクレ *Mausecret* は「信用ならぬ腹心」という意味の名前で、既に主人を裏切ってドゥブレットと通じたことがある。今回もドゥブレットに若い農夫たちを勧め、その上いつでも自分が代わりになろうと待ち構えている。しかもラウレに見つかってごまかそうとするドゥブレットを裏切り、その情事の様子をラウレに報告するのである。農夫のディール *Dire* は名の如く「自分どうまく仕事をするものはない」⁹⁾と「言う」ばかりで何もせず、すぐドゥブレットに追い払われるが、フェール *Faire* の方は口数少なく「行動」に励みドゥブレットを非常に喜ばせる。妻の裏切りを目にしたラウレは怒って〈阿呆の君主〉

の法廷に訴える。君主の代わりに裁判するのはバルトルー公 *Balletreu* である。「穴に玉をつめる」というような意味だろうか、それは「男根」を連想させる言葉だとティシエは言う。バルトルー公は「妻というものは、異議異論なく、〈言う〉より〈する〉ほうをはるかに好むものだと結論されるであろう」¹⁰⁾と法廷を閉じる。

ブドウ畑を耕すことに喩えられて、セリフはことごとく性につながる二重の意味を持つ。

ドゥプレット：私のブドウ畑は耕されないため荒れてしまった。¹¹⁾

ドゥプレット：ラウレ・プロワヤール、私は朝晩私の畑を鋤いて欲しいのよ。¹²⁾

モースクレ：もし奥さんのブドウ畑におれの苗木をつき立てさせてくれたら、鋤が地面の底まで届かないように十分深くなくちゃなりませんよ。¹³⁾

ラウレ：一生懸命やってるんだが、わしの鋤が折れ曲がるんだ。¹⁴⁾

ドゥプレット：(フェールに) しっかり鋤いて。わかった？ 地面を上から下から掘り起こしてね。¹⁵⁾ ()内は小澤による注

このようなセリフに満ち溢れ、ドゥプレットとフェールの性行為も繰り広げられる寓意的比喩的作品で、実際どのように上演されたのか興味深く思われる。欲求不満から夫を騙す若い妻を中心に、〈言う〉と〈する〉、老いて嫉妬深いラウレと精力を象徴するような裁判官を対比させ、さらに狂言回しの下男を配したコキユ物の作品ではあるが、性欲を卑猥なものとして描いているというより、むしろ、性生活の充足を求めるドゥプレットやそれを満たすフェールが肯定され、最後には男性の精力(男根)が讃えられているように感じられる。人間の性の営みがブドウ畑の耕作に喩えられていることから、性が、豊かな実り、自然の豊饒へとつながっていくからである。そしてティシエは言う。「性行為と言ってもドゥプレットの長いたっぷりした衣裳では漠然としたものだ。パントマイム

で暗示し想像力で補っただろう。しかも役者が男だけだったことはみんなが知っていた。今日大衆文化の名のもとに、男女が裸になって演じるセックスシーンを目の当たりにする我々は、淫らだ卑猥だと、かくも評判の高いファルスの性行為の慎み深さに敬意を表するところである」¹⁶⁾。

この作品はファルスには珍しく作者の名も上演の記録も残されている。1512年¹⁷⁾の謝肉祭最終日(マルディ・グラ)の祭りに、パリの世俗劇上演団体<呑気な子ども達> *Enfants-sans-souci*によって、パリのレ・アールの中央市場で演じられた。当時この劇団の〈阿呆の母〉を務めていたピエール・グランゴール *Pierre Gringore*が、世俗劇上演を擁護したルイ12世の命によって、王が敵対していたローマ法王ユリウス2世を擲擧・攻撃する意図で書いた『阿呆たちの君主と阿呆の母の劇』 *Le Jeu du Prince des Sots et de Mère Sotte*の、上演の最後をしめくくったファルスである。従って非常に政治的風刺に満ちた阿呆劇と教訓劇の後に、ティシエの言葉を借りれば「カーニバル気分」に戻すものであった。

カーニバルの語源を遡ると、「肉を遠ざける」ことを意味する中世ラテン語の *carnelevare* に行きつく。キリスト教の教会行事による数多くの祭り(復活祭・聖霊降臨祭・マリア昇天祭・降誕祭・守護聖人の祭り等々)はほとんどが、古代ゲルマン、古代ローマ、さらにはケルトのアニミズム的習俗が習合しており、カーニバルも、古代ギリシャのディオニュソス祭の狂宴をルーツとする古代ローマのサトゥルナリア祭(春の再来を祝う祭り)の流れを汲むものと言われるが、12世紀ごろ誕生した都市の祝祭であった。飲食と性の節制を教会から強要される四旬節の開始を目前にして、肉体的欲望を解放する祭りであったため、生命と豊饒を祝う古代の祭りと結び付けられたのであろう。カーニバルには、「まもなく否定されることになるあらゆるかたちの快樂にふけることを勧め許す祝祭が行われた」¹⁸⁾のであった。グランゴールの劇の観衆は笑いを待ち構えていた。淫靡な比喩は知的な観衆も満足させたことだろうし、男だけの舞台の演技はどれほどの笑いをさそっただろうか。それは、いわば教会が教える道徳的な掟から一切解き放たれたカーニバルの笑いだったの

である。

〈呑気な子ども達〉のように、カーニバルを中心に都市の祭事を組織し世俗劇も上演した“陽気な連中” *sociétés joyeuses* と呼ばれる仲間は、15～16世紀にかけてフランスの都市に何百となくあった。各地の裁判所下級職員組合〈バゾッシュ〉 *Basoches* やリヨンの印刷屋の〈誤植の殿様の家来達〉 *Suppôts du seigneur de la Coquille* のようにギルド的な団体もあったが、多くの場合12世紀以前の農村における若者組織（〈チョンガー連〉 *Bacheleries*、〈若者の僧院〉 *abbayes de la jeunesse* 等と呼ばれた）が発展的に再編成されたもので、元来、祝祭の責任と共に共同体における結婚や性生活の統制権限を担っていた。教会によって劣った性が見なされ、フランス語の *femme* が「女」と「妻」を同時に意味することからもわかるように、女はまず男の「性」の対象として否応なく結婚に縛られなければならない存在だったが、現実には女の扱いに手を焼く夫は多かったのであろう。このラウレ・プロワヤールとドゥブレットのよう、年取った夫と若い妻のカップルはファルスによく登場する。実際15世紀の都市では、適齢期に達した女性の3分の1は、功成り名を遂げた中年男性の妻になっていたという¹⁹⁾。結婚は10世紀まではかなり自由な慣習で男女とも結婚せずに同棲することもできたが、12世紀末に教会が秘蹟として位置付けることによって必要不可欠な宗教上の手続きとなり、離婚もきわめて困難になった。しかも教会は、性生活は子作りのため結婚の義務ではあるが、それに伴う快楽は罪であるとして断罪した。現実の結婚は複雑な家族関係のしがらみの中で取り結ばれることが多く、若い男性、特に徒弟や職人は経済的な理由から30歳を大幅に越えるまで結婚できないこともまれではなかった²⁰⁾。それに対して大半の女性は婚資が整うのを待って20代始めに結婚した²¹⁾。性的に不能な夫を笑うファルスの背景にはこのような社会的な状況があり、それは教会が生み出したものでもあった。

2. 淫らさで笑いを誘うもの：『マルゴの告解』 *La confession Margot*²²⁾

コキユ物とは言っても、この作品では夫は登場せず話題の中にもほとんど出てこない。告解をする人妻マルゴとそれを聴解する司祭2人だけの舞台である。ティシエは、古いテキスト（B_{Ma}）とそれを手直したと思われる少し長いテキスト（B_{Mb}）の2種類を掲げているので、ここではその2つを合わせながら見ていきたい。

マルゴが、当時義務付けられていた罪の懺悔を始める。恐らく場所は教会で、マルゴはひざまずいて祈りながら慎ましやかに口を切る。

神父様、懺悔いたします。今日私は、とても必要に迫られている修道士を救いました。私、喜んで致しました、その方は苦しんでいましたので、ですから、もし罪を犯したのなら、お赦しをいただきたいのです。²³⁾

司祭が詳しく述べるように促すと、マルゴは、彼がどんなに熱心だったか説明する。司祭は即座に赦しを与える。

何も罪を犯してなんかいませんよ。あなたは立派な赦しを得ています。聖職者によいことをする者は天国の栄光を得るのです。²⁴⁾

マルゴの告白はなお続く。修道士、隣の家の子、巡礼、隠者、それは全て男性との性関係である。司祭はその1つ1つに「立派な施しです」²⁵⁾「よいことをしたのですから後悔する必要はありません」²⁶⁾「女性として大変立派な心がけでしたよ」²⁷⁾と安心させる。B_{Ma}版には教区の司祭との子どもを夫の子にしたという告白もあるが、B_{Mb}版ではそれが省かれ、代わりに自慰行為をしていた隠者とのエピソードが事細かに述べられる。マルゴが、道端の茂みの中で彼が手いっぱい「立派なもの」*une gente chose*を握っていたと言うと、司祭はすかさずはっきり詳しく語るように促す。

司祭：言い換えた言葉を使ってはなりません。それは何だったのですか。

マルゴ：私はウナギだと思いました，生きています。

司祭：男根ですか。何だったのかよく考えなさい。²⁸⁾

マルゴは「そのもの」の様子を色かたち詳細に説明し，それがとても寒そうに見えたので暖めようとして事が始まった経過と，事後のその哀れな様子を述べる。

それが私のせいでそんなに弱々しくなってしまったので，私，すっかり度を失ってしまいました。（中略）このことで神様と司祭様に告解のお赦しをお願いいたします。²⁹⁾

全てを聞き終わった司祭は，マルゴが信心深く聖女のように暮らしていると誉め，贖罪の代わりに，毎晩でも毎朝でもフランシスコ会であれカルメル会であれ修道士たちに会いに行きその体で救ってやること，教区の司祭の必要にも応えてやること，隣人でも巡礼でも隠者でも喜ばせてやることを命じ，そうすれば罪は消えて天国へ行けるだろうと保証する。

マルゴの節度のなさと特にBMb版の描写のあからさまなことは驚くほどだが，神の前での告白を利用して性の場面を具体的に詳しく聞き出し，神の名で赦しを与えるのは，神ならぬ好色な司祭なのであった。この司祭はおそらくはBMa版でマルゴが産んだという子どもの父親であろう。そのことは次の言葉ではっきり示唆されている。

司祭：あなたに命じ告解を聞く教区の司祭へも恵みを垂れてやりなさい。彼があなたの体を必要としたときには退けてはなりませんよ。³⁰⁾

司祭が、マルゴの「罪」の原因を作っている「犯人」の1人だったということは、裁く者が実は犯人だったという逆転である。これは彼が「神の僕」などではなく、神の仮面をかぶった「人間の男」だったという逆転と重なっている。彼は神の名のもとにマルゴの男性関係を聞いて楽しみ、男性の性欲を満たす行為は「罪」ではなく「神の恵み」であると肯定し、さらに自分とも性行為をするようにとぬけぬけと命じるのである。マルゴの方とはいうと、司祭が肉体関係の相手だということはもちろん承知しているはずである。しかし告解の場では日常生活とは違い神の前にいるものとして、あくまでも無心に罪を懺悔している。少なくともBMB版では最初「泣きながら告白を始める」とあるので、自分がしたことがどれほど恐ろしい罪になるのか怖いと見ることが出来る。だが罪の意識に悩んでいるというよりも、ただ、相手にとってよかれと思えば自分も楽しんだことが罪になるのかどうか懼れているのだろう。

教会は大衆をキリスト教化するために、徹底的に罪の意識を植え付けた。その罪の筆頭は性的な関係で、汚れ・穢れをもたらすものとされた。1215年の第4回ラテラノ公会議で、14歳以上のすべての男女に告解が義務付けられると、人々は最低年1回、教会でひざまずき、司祭に向かってただ1人、自分の犯した過ちのことごとくを告白しなければならなくなった。そして、6世紀に作られ始めた聴解する聖職者のためのマニュアルである贖罪規定書には、膨大な数の多様な罪のカタログと、それに対応する罰の記載が加えられていった。たとえば「女性の自慰については七年間の節食、教会の權威によって保証されていない体位を行えば十五年間のパンと水だけでの悔悛」³¹⁾といったように。しかし、直接一般民衆に接する小教区の司祭たちは、「神学的基礎知識といたら、罪と立派な行為とを見分けられる程度のもので、大多数はラテン語も知らず、俗人とほとんど変わらなかった」³²⁾という。「司祭たちの不品行もはびこっている。結婚し、家庭をもっている司祭もいれば、内縁の妻と

暮らしている司祭（14世紀、いくつかの地域では、その数は全体の3分の1をこえていた）、酒や狩りや賭けごと遊びにうつつを抜かしている司祭もいる。要するに、彼らは俗人たちとほとんど変わらなかったのである³³⁾。告白の場を利用して女性信者と性的関係を持つ司祭や修道士の話も説話文学になじみのものである³⁴⁾。マルゴの例のように、性関係のあからさまな部分を好奇心で問いただす可能性はおおいにあったと考えられる。

マルゴも司祭もちろん笑いを誘うために誇張されて描かれているだろう。「あの、まだあって」³⁵⁾と続くマルゴの話は、度を越した男性遍歴である。巡礼とのときには、あまり熱を入れすぎて家がひどく揺れベッドが倒れてしまったと真面目に懺悔する。自分の話が女好きの司祭に刺激を与えていることを知ってか知らずか、その「しおらしさ」と話す内容の露骨さのアンバランスは笑いを生む。司祭が神の仮面をかぶって演じているとしたら、マルゴもまた、司祭の正体を知りながら従順な信者を演じているのではないかとさえ思えてくる。それは、民衆が告解のとき司祭を相手に演じていたことと同じではなかっただろうか。教会が強制した告解の義務によって、司祭も民衆も演じなければならなかったこと、多くの司祭が「神」どころではないことを両者共に知りすぎるほど知っていても、なお双方が演じなければならなかったことである。物語文学ではすでに笑いの種にしていたが、舞台上の役者がそれを演じるのを見る面白さはまた別であっただろう。観客ははっきりと「芝居」として、誰はばかることなく笑えたからである。

3. 姦通による子どもをめぐるもの：『神を讃え、たちまち呪うコラン』

*Colin qui loue et dépite Dieu en un moment*³⁶⁾

貧乏なコランは口うるさい妻とけんかをして家を出て行く。妻は心やさしい男性に救われる。しばらくして帰宅したコランは、家が豊かになっているのと子どもがいるのに驚くが、妻は「神のおかげで」と言うばかり。コランは、神は子どもまで作るとはやりすぎだと怒る。以上がこ

の作品の粗筋である。多くのファルスと同様に、この話も元になった説話があり、イタリアのポッジョの『滑稽譚』Facetiaeの中の1篇がそれだと考えられている。舞台化されたコランのファルスとこの原作との間には大きな違いが3点ある。順を追って見ていこう³⁷⁾。

(1) 原作では貧しい船乗りが幸運を求めて若い妻をおいて海へ出て行くことになっている。ファルスでは、農夫のコランと妻のけんかというファルスのシーンが加わり、コランは貧乏とうるさい妻から逃れるために妻を捨てて家を出て行く。

(2) 原作の方は、夫が帰らないのに絶望した若い妻が別の男と暮らしたとあるだけで、愛人がどのような人なのかは全く分からない。『コラン』では、捨てられて嘆いている妻を救うのは礼儀正しい立派な男性で、ティシエによれば、裁判官Officier de justiceに違いないという³⁸⁾。彼は最初金銭的な援助を断る妻に、愛を受け入れてくれることが条件だと説く。妻は夫を裏切ることはできないとその求愛を拒むのだが、相手の優しさに打たれて受け入れる。これは、多くのファルスの妻が、好色な情人に大喜びで抱きつく、モラルも何もない性欲の塊のような女性として描かれているのとは非常に異なっている。

(3) 原作でもファルスでも、戻ってきた夫は家の中が立派になり家具・調度品が増えたことに驚き、「どうしたんだ」と繰り返し妻に尋ね、その度に妻は「神のおかげで」と繰り返す。それに合わせて、神を褒め称えていた夫だが、最後に子ども（原作では3歳を過ぎた男の子、ファルスでは恐らく赤ん坊）を見つけて「神のおかげ」を繰り返されたときには、子どもまでくれるとは神はやり過ぎだと腹を立てる。原作がここで終わっているのに対して、ファルスでは、コランと妻の応酬が続く。

コラン：おれは面白くないしありがたくもないぞ、こんなことまでやられちまって。

妻：神様に脅し文句かい？ 善いことをしたのに責められるわけ？

コラン：そうよ。あんまりおれのことに首をつっこみ過ぎるから腹

が立つ。こっちはそんなに神様のことを考えてもないってのに。³⁹⁾

コラン：子どもまで作るなんて、やり過ぎだ！⁴⁰⁾

コラン：これじゃ負け勝負で、神様につきが行きすぎてる。⁴¹⁾

妻：ひどい状態のあんたに跡継ぎまで作ってくれんだから、神様を
 讃えなさい。ちっとも珍しいことじゃないよ、どこでだって言う
 じゃないか、牝牛に子牛はつきものだって。⁴²⁾

妻：雄牛は誰でもいいじゃない。⁴³⁾

妻に言い負かされてコランは不承不承受け入れざるを得ず、最後に観客に「女はごまかすのがうまい」⁴⁴⁾とメッセージを送る。

「コラン、神様のおかげだよ」⁴⁵⁾というセリフは4回繰り返される。演技を伴った舞台では大きな笑いを呼んだことだろう。子どもを見て「神はやり過ぎだ」と文句を言うコランは、「神」が誰か「男」であることをはっきり知っているのである。「いいことばかりじゃないか」⁴⁶⁾と言う妻に「説教も講釈も聞か。顔がカッカする」⁴⁷⁾というセリフがあるが、「顔」frontは「額」でもあり、「額に角を生やさせられて腹を立てる」すなわち「コキュ」にされた怒りを暗に示していると思われる。神に不平不満を言うという形でしか妻の仕業を怒れず、最後はしぶしぶながら受け入れるしかないコランの姿は更に滑稽だったであろう。

この、夫が不在の時に生まれた子どもの話は、ファブリオの第14話『太陽に溶けた子ども』*De l'enfant qui fu remis au soleil*⁴⁸⁾と『新百物語』*Les Cent Nouvelles nouvelles*⁴⁹⁾の第19話にもあり、太陽に溶けた子どもの話として中世に非常に有名だったという⁵⁰⁾。どちらも、夫が数年商売で留守をしている間に妻が愛人の子どもを生み、帰宅して驚く夫に、雪を食べたら子どもができたのだと説明する。夫は納得したふりをするが、数年たつと、商売を教えるからと子どもを旅に連れ出して奴隷に売ってしまい、妻には、「暑い日に太陽に溶けてしまった、雪でできたのだから

ら仕方がない」と告げる。妻は仕返しされたと分かるのだが黙っている、というものである。雪を食べたら身ごもってしまった、という妻の話は、言い訳にしても不思議である。夫が不在の間に不思議な計らいで子どもを授かったと妻が主張すること、これはイエス・キリストの出生を思い起こさせる。マリアもまた、婚約者のヨセフが仕事で留守をしている間に妊娠し、帰ってきたヨセフに、精霊によって身ごもったと伝えるのである。マリアに妊娠を告げた天使は天から降りてきただろうと考え、同じく天から降ってくる雪によって身ごもったという妻の言葉は、マリアの言う精霊と重なる。しかし、笑話の夫はヨセフとは違って妻の言い訳を信じず、自分がコキュにされたことを知っていた。『新百物語』の作者は「夫は妻がしたことのお返しをした。だまされた者であることに変わりなかったが」⁵¹⁾と結んでいる。

ベディエ Joseph Bédier は「雪の子」の話について、処女が不思議なきっかけで子どもができるという話には多くのバリエーションがあり、修道院では非常に好まれてさまざまな形式で作品が残されていると述べている。そしてこれほど聖職者が気に入ったのはなぜなのか理解し難いことだと書いている⁵²⁾が、彼らがそれを、キリストの聖性の要とも言うべきマリアの処女懐胎に結び付けていたことは容易に推測できる。普通の人間にとって信ずるにはあまりにも不可思議なこの問題に、聖職者であればそこだわり、信仰と肉欲のはざまで揺れる思いが「雪の子」のような話を広めることになったのではなからうか。教会は5世紀前半に、マリアを「神の母」と認めるなど処女受胎を絶対化しマリア信仰も盛んになっていくのだが、竹下節子氏によると、「中世後期からルネサンスにかけて、民間のレベルでは必ずしも、マリアの処女性性が信じられていたわけではない。13～14世紀の異端審問は、マリアの処女性を疑う言葉や行為をしばしば弾劾して」おり、15世紀半ばに「ノートルダムは我々と同じように結婚していたんだ、処女だったなんてとんでもない」と言って3年間も牢獄に入れられた人もいるという⁵³⁾。マリアの処女性性が否定された場合、ヨセフはコキュの立場になる。ホイジンガーは『中世の

秋』で、詩人デシャンEustache Deschampsの描くヨセフが「戯画化され」
「実に平々凡々たる姿で」あって、「民衆の心には、聖ヨセフは半ば喜劇
的な姿として映ったのだ」と書いている⁵⁴⁾。中世におけるこのヨセフの
姿を、石井美樹子氏が福音書・教父達の著作集・絵画・イギリス中世劇
等数多くの文献から丹念にたどり、ヨーロッパの中世人が創りだしたヨ
セフ像が「マリアの貞節を疑い、マリアを罵倒し、怒りに身を任せ」て
いるのは、「かれらにとっても、処女懐妊という奇跡が信仰の大きなつ
まづきであったことを物語ってい」と述べている⁵⁵⁾。少し長くなるが、
石井氏の文をいくつか引用しよう。

(以下の()内の注釈は小澤による)

(8世紀のコンスタンティノーブルのゲルマヌスによる「受胎告知
にかんする説教」では)若く見目麗しい天使から受胎を告知されま
すと、はじめマリアは天使だとわからず、(中略)乙女がみごもる
ことなど、この世にありえないことなのですから、人間の力で夫を
納得させることなどでできませんと抗議しますと、天使は何も心配し
ないようにとマリアを慰め、立ち去ります。マリアの懐妊を知った
ヨセフは案の定、われを忘れ、マリアを罵倒します。「すぐにこの
家を出てゆけ。そして、新しい愛人のところへゆけ。今後は、あま
えの世話は一切せぬ。わしの食卓から物を食わせはせぬ。おまえは
快樂を求めて、白髪頭のわしを辱め、嘲ったのだから」。(中略)ゲ
ルマヌスのヨセフには、「年老いた夫と若い妻」「妻を寝取られる夫」
といった、中世後期のヨセフ劇の喜劇的なモチーフがはやくもあら
われています。⁵⁶⁾

(中世から伝わるイギリスのクリスマス・キャロル「さくらんぼの
キャロル」の歌詞の中で)あるうららかな初夏の日、身重のマリア
とヨセフが庭を散歩していました。マリアは真っ赤な実をたくさん
つけたさくらんぼの木を見つけ、実を取ってくれるようヨセフに頼

みます。しかし、ヨセフはマリアの頼みをこうって断ります。「おまえをはらませた男に取ってもらうがいい」。ヨセフはこの時にいたってもマリアの懐妊にこだわっていたのです。このキャロルが流行したという事実は、マリアの貞節を疑うヨセフ像が一般に広まっていたことを証明しています。⁵⁷⁾

(中世イギリスの聖史劇の1つ、コヴェントリー市の『ルーダス・コヴェントリー・サイクル』(15世紀中葉)のヨセフ劇『ヨセフの帰国』で)ヨセフがマリアにお腹の子の父親は誰だと問うと、マリアは「あなたと神さまの子です」と答えます。身におぼえないヨセフは仰天し、「神さまは娘っ子とふざけたりなどなさない」といってさらに問いつめます。マリアは「あなたと神さまの子です」と繰り返えしい、天使が訪れてお腹の子は三位一体の神の子であると告げたと説明します。それを聞いたヨセフは激昂します。「天使だと！(以下略)」。⁵⁸⁾

(『ルーダス・コヴェントリー・サイクル』の)作者がフランスの物語に通じていたことは、ヨセフに「妻を寝取られた年寄り男、貴様の大切な弓はフランス式にへし折れている」といわせているところからもわかります。『ヨセフの帰国』に続く『ヨセフとマリアの裁判』でも(中略)「妻を寝取られた年寄り男」という表現が、6回も使われています。また、『ヨセフとマリアの裁判』では、「雪の赤ん坊」としてイギリスでもよく知られたフランスの笑話のモチーフが用いられています。

告発者一 わたしが思うに、この女性は、ほんとうのところ、
雪が降っているときに、毛布をかけないで寝ていたのでは
ないかな。
雪の一片が口に入り、
それが胎のなかで育って子になったのにちがいない。

告発者二　なら、奥さん、気をつけるがいい。
 子どもが産まれて、太陽が照っていたら、
 水になっちまうからね。
 雪はもともと水だったのだから。⁵⁹⁾

ゲルマヌスに見るように、キリスト教の教父によってマリアの受胎が早い時期からコキユのテーマと結びついてきたこと、『ヨセフとマリアの裁判』の中の「雪の赤ん坊」のモチーフが『太陽に溶けた子ども』のファブリオから取られていること（ベディエも「雪の子」のファルスが影響を与えた例の1つとして、この劇の告発者達のセリフを挙げている⁶⁰⁾）、これらを結べば、ファブリオの妻の不思議な妊娠が、マリアの処女懐胎のいわばパロディとして人々の中に広まっていたことはほぼ疑いがないと言えるのではなからうか。したがって『コラン』の作者はそれを踏まえてファルスを作ったことになる。『ルーダス・コヴェントリー・サイクル』でも、笑いの中心は、マリアがヨセフを説得するために繰り返す「あなたと神さまの子です」という言葉である。別の中世劇のマリアは6回も使っているという⁶¹⁾。無論、宗教劇であるヨセフ劇のヨセフは、最終的にはマリアへの疑いを解いてキリストの誕生を祝福する。「あなたと神さまの子」という言葉に偽りはなく、神の恵みは褒め称えられた。しかしファルスでは、妻もコランも、そして観客も、コランの妻の繰り返す「神のおかげで」という言葉には裏があることを知っていた。妻は裏切っており、コランはコキユであり、観客はその一部始終に立ち会っていた。理解できないような神秘は何もない人間の世界なのであった。雄牛がいなければ子牛はできない。それを「神のおかげ」と丸め込む妻と、腹を立てるコランを、人々は存分に笑い合ったであろう。

教会がキリスト教一色に染めようとした中世に、人々の心の底にある本音、すなわち男女の性行為なしに子どもが生まれるなど信じられないという思いが、中世末期にはすでにさまざまところで現れていたことは、ホイジンガーの言葉からも分かる。14世紀から15世紀にかけての神

学者ジャン・ジェルソンJean Gersonは聖ヨセフを崇拝するあまり、ヨセフの結婚生活、ヨセフの禁欲等々を事細かに調べ、ヨセフはまだ50歳にもなっていない、と断言した。また彼は洗礼者ヨハネの精液についての観察までしている⁶²⁾。ドミニコ派はマリアの無原罪の御孕りに^{やど}ついての論争で、聖処女が初めから原罪をまぬかれていることを否定する立場を取った⁶³⁾。さらに「(中略) だいぶ前から私は信仰に疑いをいだいてきた(中略)。三位一体のことなどちっとも信じられなかったし、神の子が人間の女の体に宿りにくるほど、身を落とすとは思えないし、(以下略)」と語る人までいたことが紹介されている⁶⁴⁾。『コラン』に対する笑いは、そのような社会状況と軌を一にしているように思われる。

Ⅲ. 結び

ファルス の 主要 な テー マ で あ る 「 性 欲 へ の 笑 い 」 は 中 世 キ リ ス ト 教 社 会 と 深 く 結 び つ い て い る 。 コ キ ュ 物 の 背 景 に は 、 老 人 と 結 婚 し た 若 い 妻 が 多 く 、 若 い 男 性 が な か な か 結 婚 で き な い と い う ゆ が ん だ 状 況 と 、 夫 婦 の 性 生 活 で 快 楽 は 許 さ れ な い と い う 教 会 の 教 え が あ っ た 。 「 性 欲 」 は キ リ ス ト 教 の 根 本 に 関 わ る 重 大 な 罪 と し て 否 定 さ れ 、 人 々 は 告 解 の 場 で 性 関 係 の 些 細 な 罪 を も 懺 悔 し な け れ ば な ら な っ た 。 し か も 「 神 」 の 名 の も と に 告 解 を 聞 く 司 祭 や 修 道 士 は 俗 人 と ほ と ん ど 変 わ り な く 、 告 解 の 場 を 利 用 し て 懺 悔 す る 女 性 と 肉 体 関 係 を 結 ぶ 者 ま で い た 。 人 々 は 常 に 自 分 の 中 の 性 衝 動 と 向 き 合 い 、 そ れ を コ ン ト ロ ー ル し な け れ ば な ら な っ た だ ろ う 。 そ し て そ れ が 難 し か っ た こ と は 、 お そ ら く 若 者 た ち の 半 分 が 、 少 な く と も 人 生 に 一 度 、 強 姦 や 輪 姦 の 事 件 に 卷 き こ ま れ て い た こ と を 推 定 さ せ る と い う 、 デ イ ジ ョ ン の 裁 判 記 録 が 物 語 っ て い る ⁶⁵⁾ 。 若 者 が 組 織 す る 祭 り の 場 で 、 フ ェ ル ス は だ か ら こ そ 好 ん で 「 性 欲 」 を 笑 い の 対 象 と し た の で は な か ろ う か 。 フ ェ ル ス の 中 で は 性 欲 は 否 定 さ れ な っ た 。 性 生 活 に 不 満 な 妻 は 情 人 を 持 っ て 楽 し ん だ 。 舞 台 上 の 俗 っ ぱ い 聖 職 者 は 存 分 に 笑 い の 対 象 に な っ た 。 キ リ ス ト 出 生 の 不 思 議 す ら も 笑 い の 種 に で き た の で あ る 。 観 客 は 笑 い 合 っ た 。 そ れ は 自 分 達 の 本 当 の 姿 を 、 善 悪 で は

なく事実として認め合ったということではないだろうか。嘘を嘘として、芝居を芝居として一緒に笑うこと、何よりも「性欲を備えた存在としての人間」を笑うこと、それこそがファルスの大きな目的であり、人々が必要としていたことに違いない。バフチーンは「民衆の祝祭の笑いは、笑っている者自身も笑いの対象となる」⁶⁶⁾、「笑いの原理は、カーニバルの儀式を組織しつつ、一切の宗教的教会的独断主義、神秘主義、敬虔主義から解き放つ」⁶⁷⁾と言ったが、ファルスの「性欲への笑い」は、まさしく祝祭の笑いであり解放の笑いであったと言えよう。

(博士課程後期課程)

注

- 1) Ley-Flaud, B., *La Farce ou la machine à rire*, Genève, 1984.
- 2) Lanson, G., *Histoire de la Littérature française*, Paris, 1916, p. 217.
- 3) *Ibid.*, p. 218.
- 4) ジャック・ル・ゴフ編／鎌田博夫訳、『中世の人間』、法政大学出版局、1991年。
- 5) Gauvard, C., Livera, A. de et Zink, M. (dir.), *Dictionnaire du Moyen Age*, Paris, 2004, p. 517.
- 6) Tissier, A. (éd.), *Recueil de farces (1450-1550)*, 13 vol, Genève, 1986-2000. (RFと略す)
- 7) Tissier, A. (éd.), *Farces françaises de la Fin du Moyen Age*, transcription en français moderne, 4 vol, Genève, 1999.
- 8) RF, t. 2, Tis. XI.
- 9) «Oncques ne veistes tel ouvrage / Que je y feray, je vous prometz.» (vv. 148-149), «Jamais, jamais / Ung tel ouvrier ne fut congneu.» (vv. 150-151), «Je cuyde qu'il n'y a, ma dame, / Tel ouvrier au monde que moy.» (vv. 160-161).
- 10) «[...] on conclura / Que les femmes, sans contredire, / Ayment trop mieulx Faire que Dire.» (vv. 298-300).
- 11) «[...] ma vigne se gaste / Par deffault[e] de labourage.» (vv. 14-15).
- 12) «Raoullet Ployart, / Je prens plaisir que tost et tart / Labourer ma vigne on se joue.» (vv. 21-23).
- 13) «Qui me laisseroit prouviner / En la figne de ma maistresse, / La terre seroit bien espese / Se ma besche ne alloit au fons.» (vv. 38-41).

- 14) «Je m'y employe / De bon cuer, mais ma besche ploye.» (vv. 99-100).
- 15) «Mais houez ferme, entendez-vous? / Renversez c'en dessus dessoubz / La terre.» (vv. 199-201).
- 16) *RF*, t. 2, p. 250-251.
- 17) 当時のユリウス暦では1年の始まりが3月25日の復活祭前と定められていたため1511年であるが、その後グレゴリオ暦が作られ1月1日を年の始まりと変更した。現在では新暦に従って1512年と認められている。(*RF*, t. 2, p. 236, note 8)
- 18) グリン・ウィッカム／山本 浩訳、『中世演劇の社会史』, 筑摩書房, 1990年, p. 186.
- 19) 阿部謹也, 『西洋中世の男と女』, 筑摩書房, 1991年, p. 192.
- 20) ジャン＝ピエール・ルゲ／井上泰男訳, 『中世の道』, 白水社, 1991年, p. 288.
- 21) ナタリー・ゼーモン・デーヴィス／成瀬駒男・他訳, 『愚者の王国・異端の都市 近世初期フランスの民衆文化』, 平凡社, 1987年, p. 100.
- 22) *RF*, t. 6, Tis. XXXVII.
- 23) «Je me confesse à vous, beau pere. /J'ay anuyt secouru ung frere / En sa grande necessité. / Je l'ay faict par joyeuseté, / Car il en estoit empesché. / Par quoy, sire, se j'ay peché, J'en requiers absolution.» (BMb, vv. 1-7).
- 24) «Vous n'y avez point offensé; / Noble pardon avez gagné:/ Il gaygne la gloire des cieulx, / Qui faict bien aux religieux.» (BMa, vv. 21-24).
- 25) «Mais avez faict belle aulmosne.» (BMa, vv. 41-42).
- 26) «Dame, se ne seroit pas sens, / De vous repentir de bien faire.» (BMa, vv. 49-50)
- 27) «M'amyne, vous avez esté / Femme d'une très grand constance,» (BMb, vv. 68-69)
- 28) LE CURE: «Il ne fault point parler par glose. / Qu'estoit-ce?», MARGOT: «Je croy qu'une endoille / Toute vive», LE CURE: «Ou une couille./ Avez bien lequel c'estoit.» (BMb, vv. 84-87).
- 29) «[...] je fus esperdue / Quant je la vis ainsi fondue / Et gastée par mon meschief; / [...] / Se en requier pardon à Dieu / Et à vous absolution.» (BMb, vv. 121-123, vv. 128-129).
- 30) «Aussi, soyez misericors / Au curé de vostre parroisse, / Qui vous ordonne et confesse; / S'il a de vostre corps mestier, / Ne luy faictes point l'estrangier.» (BMb, vv. 107-110).
- 31) アニェス・ジラル／池田健二訳, 『ヨーロッパ中世社会史事典』, 藤原書店, 1991年, p. 44.
- 32) 同上, p. 204.

- 33) 同上, p. 204.
- 34) *RF*, t. 6, p. 388, note 44. ポッジヨ Poggio (Le Pogge)のラテン語の『滑稽譚』*Facetiae* (1470年ごろイタリアで出版。16世紀初頭Guillaume Tardifによる仏訳*Facéties*) から、告解の場で聖職者が女性と関係を持つ話がいくつか挙げられている。
- 35) «Ha! sire, de ce suis honnye,» (v. 25), «Ha! sire, encore suys-je certaine» (v. 32), «Oultre, entendez ma rayson;» (v.43), «Entendez cy [...]» (v. 55). (BMa)
- 36) *RF*, t. 1, Tis. II.
- 37) ポッジヨの原作のラテン語文をティシエがフランス語に逐語訳したもの (*ibid.*, pp. 113-114) を参考にした。
- 38) *RF*, t. 1, p. 120.
- 39) COLIN: «Je ne luy en sçay gré ne graces./ De s'estre de tant avancé.» FEMME: «Usez-vous à Dieu de menasses? / Fault-il du bien estre tancé?», COLIN: «Ouy, car il m'a offensé / De soy mesler de tant de choses. / A luy je n'ay pas tant pensé.» (vv. 476-482).
- 40) «Le cas trop me griefve et escorche./ Fere enfans, c'est trop procedé!» (vv. 492-493).
- 41) «Car cela me rend lorche; / C'est à Dieu trop tiré le dé.» (vv. 494-495).
- 42) «Il vous a fait ung heritier, / Louez Dieu en vostre mestier. / Car cecy n'est pas de nouveau; / C'est le dit de chascun quartier: / A la vache est tousjours le veau.» (vv. 503-507).
- 43) «Ne vous chault qui soit le toreau.» (v. 511).
- 44) «Comment femme du tout renverse / Nostre entendit; et pour relicques,» (vv. 519-520).
- 45) «Colin, de la grace de Dieu.» (vv. 440, 444, 448 et 475).
- 46) «[...] se ne sont que roses.» (v. 483).
- 47) «Je n'y entens texte ne gloses, / Et [j'] ay bien eschauffé le front.» (vv. 484-485).
- 48) Montaiglon A. de et Raynaud G., *Recueil Général et complet des fabliaux des XIIIe et XIVe siècles*, 6 vol, Paris, 1872-1890. 『フランス中世処世譚』(森本英夫訳編, 社会思想社, 1985年)に「お天道様に溶かされた子供の話」として所収されている。
- 49) 1462年成立, 1486年印刷の, 作者不明の物語集。
- 50) Bédier, J., *Les Fabliaux: Etudes de littérature populaire et d'histoire littéraire de Moyen Age*, Paris, 1925, pp. 460-461.
- 51) Sweetser, Franklin P., (éd.), *Les Cent Nouvelles nouvelles*, Genève, 1966, p. 130.
- 52) Bédier, J., *op. cit.*, p. 461.

- 53) 竹下節子, 『聖母マリア〈異端〉から〈女王〉へ』, 講談社, 1998年, p. 124.
- 54) ホイジンガー／兼岩正夫・里見元一郎訳, 『中世の秋』, 角川書店, 1984 (1976), pp. 334-337.
- 55) 石井美樹子, 『神の道化師 聖ヨセフの肖像』, 白水社, 1991年, p. 7.
- 56) 同上, pp. 74-75.
- 57) 同上, p. 117.
- 58) 同上, p. 143.
- 59) 同上, p. 145.
- 60) Bédier, J., *op. cit.*, p. 461.
- 61) 石井美樹子, 前出, p. 156. ここではヨーク市のヨセフ劇 (1415年頃) (p. 140).
- 62) ホイジンガー, 前出, pp. 309-310.
- 63) 同上, p. 310.
- 64) 同上, p. 326.
- 65) ジャン＝ピエール・ルゲ, 前出, p. 286.
- 66) ミハイール・バフチーン／川端香男里訳, 『フランソワ・ラブレーの作品と中世ルネッサンスの民衆文化』, セリカ書房, 1973年, p. 18.
- 67) 同上, p. 13.

参考文献

- Tissier, A. (éd.), *Recueil de farces (1450-1550)*, 13 vol, Genève, 1986-2000.
- Tissier, A. (éd.), *Farces françaises de la Fin du Moyen Age*, transcription en français moderne, 4 vol, Genève, 1999.
- Bédier, J., *Les Fabliaux: Etudes de littérature populaire et d'histoire littéraire de Moyen Age*, Paris, 1925.
- Cohen, G., *Etudes d'histoire du Théâtre en France au Moyen Age et à la Renaissance*, Gallimard, 1956.
- Gauvard, C., Livera, A. de et Zink, M.(dir.), *Dictionnaire du Moyen Age*, Paris, 2004.
- Lanson, G., *Histoire de la Littérature française*, Paris, 1916.
- Lewicka H., *Etudes sur l'ancienne farce française*, Paris, 1974.
- Montaignol A. de et Raynaud G., *Recueil Général et complet des fabliaux des XIIIe et XIVe siècles*, 6 vol, Paris, 1872-1890.
- Petit de Julleville, L., *Répertoire du Théâtre comique en France au Moyen Age*, 1886.
- Rey-Flaud, B., *La Farce ou la Machine à rire, théorie d'un genre dramatique 1450-1550*, Genève, 1984.

Sweetser, Franklin P., (éd.), *Les Cent Nouvelles nouvelles*, Genève, 1966.

Zink, M., *Littérature française du Moyen Age*, Paris, 2004.

- アニェス・ジラルール／池田健二訳、『ヨーロッパ中世社会史事典』, 藤原書店, 1991年.
 イヴ＝マリ・ベルセ／井上幸治監訳、『祭りと叛乱 16～18世紀の民衆の意識』, 新評論, 1980年.
 ヴォルフガング・ハルトゥング／井本响二・他訳、『中世の旅芸人』, 法政大学出版局, 2006年.
 グリン・ウィッカム／山本 浩訳、『中世演劇の社会史』, 筑摩書房, 1990年.
 ジャック・ル・ゴフ編／鎌田博夫訳、『中世の人間』, 法政大学出版局, 1991年.
 ジャン＝ピエール・ルケ／井上泰男訳、『中世の道』, 白水社, 1991年.
 ジョルジュ・デュビ／篠田勝英訳、『中世の結婚』, 新評論, 1984年.
 ナタリー・ゼーモン・デーヴィス／成瀬駒男・他訳、『愚者の王国・異端の都市 近世初期フランスの民衆文化』, 平凡社, 1987年.
 ホイジンガー／兼岩正夫・里見元一郎訳、『中世の秋』, 角川書店, 1984 (1976) 年.
 ミハイール・バフチーン／川端香男里訳、『フランソワ・ラブレーの作品と中世ルネッサンスの民衆文化』, せりか書房, 1973年.
 阿部謹也、『西洋中世の男と女』, 筑摩書房, 1991年.
 石井美樹子、『神の道化師 聖ヨセフの肖像』, 白水社, 1991年.
 竹下節子、『聖母マリア〈異端〉から〈女王〉へ』, 講談社, 1998年.
 森本英夫訳編、『フランス中世処世譚』, 社会思想社, 1985年.